

An abstract artwork featuring a textured background of blue, white, and black. A horizontal film strip is visible in the upper left, and a sphere with a network of lines is in the lower left. The title and author's name are printed vertically on the right side.

# 時の壁

中村光夫

新潮社版

# 呵の壁

中村光夫

新潮社版



時<sup>とき</sup>の壁<sup>かべ</sup>

著者 中村光夫<sup>なかむらみつお</sup>

昭和五十七年 六月 五日印刷

昭和五十七年 六月 十日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二  
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一  
定価 一〇〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

印刷所・株式会社金羊社 製本所・神田加藤製本株式会社  
© Mitsuo Nakamura Printed in Japan 1982

# 時 の 壁



遠いと聞いてはいたが、駅から場末らしい街並を通りぬけると、竹藪の向うは一面の麦畑だった。

「この先なの」

母が草履をひきずりながら云った。

「へえ、あと五分ほどで。閑静なお住居ですよ」

不動産屋の山口老人が行手のこんもりした森を指しながら答えた。

「野なかの一軒家ね。夜がこわいわ」姉の朋子が無遠慮に口をはさんだ。

「いえ、そばに一軒建ちかけているお家がもう売れて居りますから、すぐにお隣りができます。あと四五軒も続けて建ちます」

老人は躍起になって「物件」を弁護した。

『何もそうむきになることはない。私たちはどうせこの家に越してくるほかはない。この男だつて知ってる筈だ』こう思うと腹が立って、朋子は勝手な悪口をつづけた。

「せっかくこんなとこまできて、御近所が賑やかすぎるのも困るわね。便利なところなら、うるさいのも我慢するけど」

山口老人は黙って先に立って歩きながら、肚のなかで、

『口のへらないアマだな、何でも難癖をつけやがる』

もうこの『若い』とは口をきくまい。手金を打たせて、皆に実物を見せるところまで漕ぎつければ、もう此方のものだ。家の者など口先で苦情を云っても、魚籠いづくのなかの魚と同様、話の大筋から撥ねだすことはありやしない。

この家で財布を握っているのは一昨日手付金をおいて行った爺さんで、この連中は脛かじりらしい。爺さんが乗気な以上、こいつらが何を云おうと齒牙にかける必要はない。

「周旋屋さん、まだ遠いの」

また母親がおずおずした調子で彼の思案を妨げた。

『ふん、こらえ性のない女だな、いい齡をして』こんな氣持を、職業用の愛想笑いで包んで、  
「いえ、もうすぐです。あのこんもりした杉林のかげで、ほら、もう屋根が見えてます」

歩きながら、前方の森のなかの二階家を指さした。

「わあ、きれいな家。さあ駈けて行こう」

さっきから黙って、みなのもとについてきた肇が、いきなり大声をあげて走りだした。

「あぶないわよ、そんなにして。転ぶと」

母が小学生にするように、大声で注意した。しかし肇はあとをふりむかず、畦道を埃を蹴た

てて走った。

「よっぽど嬉しいのね、新しい家が。いつもぼろ家ばかりだったものね、此頃の引越ときたら」

朋子は山口老人の耳を憚るのを忘れていた。

「そりゃ、いつもぎりぎりになってから、二三日で家探<sup>いえ</sup>してから引越までするんだもの。いいとこなんか空いてっこないよ」

母も外聞の悪いことを口走って、溜息をついた。ここ二年ほどの間に五六回くりかえした、やりくりの引越を思いだすらしかった。

近づくにつれて、畦道と間違ひそうな畑のなかの一本道の向う端に、新築の二階家が見えてきた。まわりの生垣は生えそろわず、人造石の門柱は値段相応であったが、それでも誰も住んだことのない真新しい家は、どことなく心を浮きたたせた。

壁が廊下の雨戸をあけたので、座敷には明るい春の彼岸すぎの陽がさしこんだ。

「だめよ、やたらにあげちゃあ。ひどい埃だから」

足袋をよごさぬために、用意してきたスリッパをはいた母が云った。

「でも具合を見ておかなきゃあ。雨戸は毎日あげたてするんですもの」

朋子は弟を弁護しながら、東側の小窓をあけた。

「まあ、こっちにも、ちょっと庭があるわ。遠くの森まで見えるし、二階はきつともっと眺めがいいわ。お月見でもしたら素敵ね」



彼女ははしゃいだ調子で云って、窓枠に腰をおろした。

「ええ、野中の一軒家ですから、いまのところ。二年もすれば、この辺はびっしり家が並んじまいますよ」

山口老人は安心したのか、ちょっと意地悪な口をきいた。

「すると、お月見は、今年かぎりというわけですか」

肇がすかさずたずねた。

「いえ、そんなことはありません。月なんか、どこからでも見えますよ」

老人は少し慌てて答えた。それが不動産の「傷」を弁護するようだったので、朋子は声を立てて笑った。

「山口さん、父は二時のお約束でしたね」

母が話題をかえた。

「ええ、もうそろそろおいでと思いますが」

云いながら不動産屋は腕時計を見た。

「森さんもお見えになるのね」

母が念をおすように云った。

この家を建てた請負師と子供らの祖父は二時にここで落合って、山口の立会のもとで「話をきめる」予定だった。

「おじいさん、めずらしく、遅刻かしら」

云いながら朋子は立ちあがった。時計は二時を五分ほど過ぎていた。今日は三時から卒業式の予行があり、休むと友達が迷惑する。ここからは道に馴れないし、二時になったら出かけねばならないと、彼女は母に云っておいた。

たしかに止むを得ぬ理由だったが、娘が現在目の前で、一分も待とうとせず、帰って行くのを見ると、やはり面白くなかった。

「それじゃ、行ってらっしゃい。途中気をつけてね」

きまり文句で、玄関に見おくりながら、母はめずらしく定刻になっても姿を見せぬ父と、容赦なく出かけて行く娘の、双方に腹をたてていた。

父はいつも会合の約束に五分とおくれることはなかった。ことに他人が混る場合には十分くらい定刻より早く来るのが通例であった。それが今日はどうしたのか。大事な話のときは、得て差支えがおこりやすい。ふだんは頑健な父が、もし急病になったら、どうしようか。小綺麗な家と安定した生活、この夢がにわかに遠ざかって行くのに、彼女は身ぶるいした。

それにしても朋子の薄情ぶりはどうだろう。母の気持をまったく無視するのは、今に始まったことではないにしても、この建物の売買が、一家にどんな重味を持つか解っている筈ではないか。

むろん卒業式がどんなに大切かわかっている。その式の次第が複雑で、予行で呑みこんでおかないと、本番のとき、あたりが迷惑するのも事実だろう。

しかし十分や十五分出発をおくらせて、ここで祖父に感謝の一言を述べて行ってもいいでは

ないか。孫の笑顔ほど祖父を喜ばせるものはないのに。

「おじいさんにはよく云っておくよ。お前がよろこんでるってね、この家が気に入って」

彼女は硝子戸をあけてでかける娘のうしろ姿に声をかけた。一言云いわけを期待する気持ちだった。

「そんなこと云う必要ないわ。おじいさんがここに居ると仰言れば、くるほかはないんだもの。賛成も反対もないわ」

娘は先をいそぐのか、ふりむかずに答えた。

「それじゃ、お前、まるでいやいや来ましたという風に聞えるじゃないの」

母はかっとして、喧嘩腰になった。

「年寄りが一生懸命に心配してるんだから、せめて喜んでやって頂戴」

「いいわよ。おじいさんの有難いのはわかってるつもりよ」

朋子は早く話をきりあげたい気持ちを露骨にだした。

「じゃあ、行ってらっしゃい。うまく云っとくわ」

母もくどく云う気持はなかった。

茶の間にもどると、肇が彼女の顔を見てにやりとした。玄関の問答がみな耳に這入ったらしかった。

黙ったまま、冷えた白湯を茶罐から注ぎながら、

「宮田さんは来るかしら。この家に」

と他人の噂でもするような調子で、云った。母はちょっと表情を硬くしたが、何気ない語調で、

「さあ、こないよ、きつと。今度佐藤の叔父さんの世話で、関西へ行くと云ってたから」と、白湯をすすりながら答えた。

宮田というのは養子にくる前の父の姓であり、二月ほど前に、祖父に離婚を求めたことが、子供らの耳に這入ってから、彼らは父を旧姓で呼ぶのを粹なやり方と思っていた。

佐藤の叔父というのは、やはり養子に行った父の実弟で、実業家として多少成功しているのだ、親戚たちの世話もほとんど引きうけていた。父の離縁話も、本人よりむしろ佐藤の叔父との間で運ばれていた。

「じゃあ、もう籍は抜けたの」

肇はわざと先廻りした推測を母にぶつけた。

「いえ、そんなことないわよ」

母はわざとらしく、落着いて答えた。

「どうなってるのかな、一体。おじいさんが来たらきいて見ようか」

おどかしのつもりもあって、こういうと、母は予期した通り、狼狽して、

「余計なことをするんじゃないよ、子供のくせに。わたしの方は、態度は判っきりしてるのよ。でもおじいさんが煮えきらないらしいの、いざとなると」

といくぶん邪険な声でこたえた。

「ことによると、お向うさんだって、奥さんや子供と別れたくないかも知れない」  
肇は母を慰める気持で道化て見せた。

「生意気だね。子供のくせに」

云いながら、母は軽く笑い声を立てた。

「子供だから心配するんです。被害甚大ですからね」

肇は道化の調子でつづけた。

「それにしてもおそいわね。おじいさん」母は腕時計を眼の前にあげて見ながら、

「山口さんだってそうお待たせしちゃわるいのに、すみませんわ」

彼の存在に始めて気付いたような挨拶は、さっきから不用意な言葉をみな聞かれてしまった腹いせかも知れなかった。

しかし老人は何も気にかけない顔付で、

「いえ、私の方はかまいません。こうして新しいお住いを見せていただくのが道楽ですから」

云いながら、彼は立ちあがって、がらんとした空家のなかを少しずつに歩きまわった。

家だけでなく、新しく知り合ったこの家族の内幕も、銘々の性格や立場を呑みこむにつれて、まるで芝居でも見るように、彼の興味をひいた。

思春期にかかった、我儘育ちの娘と息子をかかえた世間知らずの中年女に、できれば相談相手になって、さまざまの忠言を与えてやりたかった。

玄関のガラス戸があいて、複数の足音が聞え、祖父が途中で会った、売主の森と一緒に這入ってきた。

森は日焼けした五十がらみの男で、中肉中背の精悍な身振りに、並びのいい丈夫そうな歯を見せてよく笑った。

七十に手が届くまで、下町で開業医をしている祖父は、現在まで積み重ねた経験にてらして、出入りの大工に紹介された森を一目で信用した。

建売の家が、売主の人物によつては、はなはだ危険な買物であることは、当時の常識であったが、土地入手の厄介な交渉、大工の監督その他の手数が省け、曲りなりにも自分の注文にあった家が、世話なしに買えるのは、便利なやりかたに違いなかった。

しかし割安だけに、目につかぬ所で、手を抜かれ、材料をごまかされる危険は、いつもついて廻った。

結局、売主の人柄を信用するほかないのだが、その点森は初対面から、彼の目鏡にかなった。『人間身体が丈夫で、素直なら、何を任せても間違いない』というのが彼の口癖だったが、森はこの条件を二つともみたしていた。

丈夫なことは請負師の商売柄、いわば当たり前だったが、客商売に似合わず、口下手で、たまに酒を吞んでも、酔うと自分の仕事と家族の自慢しかせず、まったく面白味のない男だったが、そういう時、安い吞屋の勘定をきちんと割るのも、盆暮に一寸した使物を届けてくるのも、彼の氣に入っていた。

石橋を叩いて渡る性格の彼は、森と一緒に売家を見に行ったことは数えきれなかったが、買う約束ができたのは、これが始めてであった。

この前、一緒に見に来たとき、松井老人は大体買う肚をきめながら、裏口の排水について苦情を云った。しかしその点は綺麗に要求通り直っている筈だ。

売買の契約は、今日間違いないでできる筈で金の支払いもすむに違いない。

そして娘の一家に安住の場所を与えた老人は、当然彼らに感謝され、酒の一杯も御馳走になるだろう。

この尤もな期待をまず破ったのは、孫の朋子であった。彼女は野道のぬかるみで踏みちがえをしたとかで、右足を引きずりながら不機嫌な顔で歩いていたが、祖父に、黙ったまま頭を下げただけで、森には知らぬ顔で通りぬけようとした。

「おい、御挨拶しといで。今度、家を建てて下さった方だ」

祖父が思わず無礼をとがめる口調で云うと、朋子はやっと足を止めた。

「始めまして。このたびはお世話になります」

馬鹿丁寧に頭を下げられたが、森は一向気にせず、

「お嬢さんですか。こちらこそよろしく」

森は朋子の引きずっている足に眼をやりながら答えた。

「お前、あの家を見たのかい」

祖父は内心彼女が売買の現場に立会わないのが不服だった。家族の者がみな、それを喜び、彼に感謝してこそ、世話の仕甲斐があるというものだった。

「ええ、さっき、二時間ばかり、ゆっくりしたわ」彼女は相変らず不機嫌な表情で答えた。  
「それで」

祖父は知らぬ間に、問いつめる語気になった。

「むろん結構だと思いますわ。どこにでも住わしていただければ……私達の身分として」

朋子は祖父と視線が合わぬように眼をふせたまま、押しだすように云った。  
「いやだけど、仕方がないというのかね」

祖父はかっとなって反問した。『そんなら、勝手にしろ』という言葉がつづけて出るのをや  
つと抑えた。もともと彼は孫娘から軽い感謝の辞を求めただけであつた。それを素直に云つて  
くれれば、彼と森とは一層上機嫌で家に着ける筈ではないか。

「住居の選り好みをする柄じゃないと云ったまでです」朋子はますます冷静に答えた。

『そんなこと聞いてやしない。お前にあの家が気に入ったか入らないか、素直に答えればいい  
んだ。それをどうしてそうひねくれるんだ』肚のなかでこう云いながら、彼は孫娘を睨んだ。  
しかし朋子が口をきかぬうちに、森が声をかけた。

「お嬢さん、これから、おでかけ」

「ええ、一寸学校へ」

朋子は云いわけめいて聞えぬように、わざとぶっきら棒に答えた。



「今時分から……授業じゃないだろう」祖父がすかさず口をだした。

「ええ、でも授業より大切かも知れないわ。卒業式の予行ですから」

朋子はわるびれずに答えた。

「どうしたんだ。その足は。泥だらけじゃないか」右足を引きずって行きかけた孫娘に祖父が問いかけた。

そのやわらいだ口調を孫娘は素直に感じて、

「ぬかるみに踵をとられたの、くじいたんじゃないかなさそうだけど」と甘えるように右足をあげて見せた。

「ぬかるみなんてあるのか。乾いて埃が立ってるじゃないか」

祖父が野道の方角を眺めておかしそうに云った。

「それが表だけ乾いて、なかがぐちゃぐちゃしてるの。まるであんころ餅みたい。踵を吸いこんであぶないわ」

朋子は云い返してから、今度は森にむかって、「ねえ、この辺の道路はどこもあんな風なんですか」

「そうですね、新しく建った家のまわりは役場もなかなか手が廻りませんから」

森はまともな返事をした。

「人間をローラー代りに使って、地ならしさせられたら、住んでる者はたまらないわね。何しろ懐中電燈がいるわ」